
熾火

須藤彦吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熾火

【Nコード】

N7187Y

【作者名】

須藤彦吉

【あらすじ】

「そらさんとおっしやるのかな？」

図書館司書のそらに声を掛けてきた一人の老人。大怪我をするところを助けられたことで、そらと老人 草薙伊織は急速に打ち解けていく。

そんな中、そらと夫の喬生は、その母親の恋人が起こしたトラブルに巻き込まれてヤクザに喰い物にされそうになるが、その危機をまたしても草薙に救われる。だが、礼をしたいというそらに草薙は北陸の古都、金沢への同行と奇妙な頼みごとをするのだった。

「妻と別れる為に、私の後妻を演じて戴けないでしょうか？」

「そらさん、とおっしゃるのかな？」

男の呼びかけにそらは顔を上げた。

レファレンスカウンターの前に立っていたのは和服姿の瘦身の老人だった。やや心もとない量の白髪を丁寧後ろに撫で付けて、同じ色の口ひげを申し訳程度に蓄えている。年季の入った指物職人を思わせる浅黒い顔の中でひととき目立つ厳しい眼差しは、若かりし頃の彼がさぞ苛烈な人物だったことを思わせるものだった。だが、目許に深く刻み込まれた皺がほんの少し垂れ下がっているせいで、その印象も幾分は和らいでいる。

「そうですけど？」

そらは答えた。同時に眼鏡の蔓を手でつまんで持ち上げる。伶俐な顔立ちの彼女がやると取っつき難そうに見えるとよく注意されているが、長年の癖なのでなかなか直らない。

「漢字で？ それとも、ひらがな？」

「ひらがなです。最近は漢字の子も多いみたいですけどね」

「たとえば？」

そらは指で空中に”宙”という字を書いてみせた。他にも”蒼空”や”想良”などと書く場合もあるが、戸籍の字は基本的に何と読んでもいいので、極論を言えば”海”と書いて”そら”でも構わないことになる。

「わたしの頃は当て字は好まれなかったみたいです。普通に読めない字を当てられるよりは、ひらがなで良かったかなって思っていますけど」

「そのようすな。いや、いいお名前だ」

「いえ、そんな……」

愛想笑いを返しながら、そらはこの老人が何故、自分の名前の字面を不思議がったのだらうと訝った。

答えは胸元にぶら下がっている名札だ。そらがパートタイムで勤めている岡崎市立中央図書館の司書の名札は普通に漢字表記なのだが、併設の児童図書館が本来の部署である彼女の名札はひらがなでひぐちそら と表記してあるのだ。

「どうかなさいました？ お捜しの本でも？」

そらは自分の仕事を思い出したような顔で話を変えた。老人は少しだけバツの悪そうな笑みを浮かべた。

「実は新聞の縮刷版を見せて戴こうと思ったんですが、捜している年のものが書架から抜けていましてね。それで、どこにあるのか伺おうと思ひまして」

「それは申し訳ありません。いつのものを？」

「昭和57年の2月です」

老人は目当ての地方紙の1年分だけがなく、他の年のものは書架にあつたと言った。

「だとすると、おそらく、どなたかがまとめて持っていかれてるんでしょうね」

「なるほど、そうですね……」

老人の表情が曇った。

「縮刷版は貸し出しをされているんですか？」

「いえ、縮刷版は館内での閲覧のみで、貸し出しはお断りしております。ですから、そのうちに戻されるとは思いますが……」

新聞社がインターネットで過去の記事のデータベースを公開するようになつてから、新聞の縮刷版を見るために図書館に足を運ぶ人間は明らかに減っている。少し離れたところにあるもう一つの市立図書館よりは調べ物のための来館者が多いはずだが、閲覧室が無人の日はそうでない日より明らかに多い。

それでも、データベースでは公開されていない昔の記事に用があたり、或いはインターネットを上手く利用できない世代の利用者

というのはいる。

縮刷版の書架はカウンターの目の前だ。そらはレファレンスカウンターから見える範囲の閲覧席を見渡した。

(……やっぱりいた)

窓際の閲覧席に週に2回ほど縮刷版を読みに来る常連がいた。しかも、この男は一度に読めもしない縮刷版を山のように積み上げるだけでなく、まともに元の位置に戻したこともないという司書課の天敵だった。

1度に読まないのでしたら、その分だけでも棚に戻して戴けませんか？

以前、課長がそう直談判したことがある、とそらは聞いている。しかし、そのときは男が注意されたことに激昂して大騒ぎになったはずだった。「俺はちゃんと税金を払っているのに、なんで県の施設を自由に使えないんだ!!」と怒鳴り散らしたのだ。

税金を払うことと公共のルールを守らないことに何の関係があるのか、そらにはまったく理解できない。持ち前の正義感がムクムクと頭をもたげ始めていることにそらは気づいた。

「なんでしたら、持ち出されている方に返して戴くように言いましたよっか？」

その声音に含まれる憤りを感じたのか、老人は宥めるような柔らかい笑みを浮かべた。

「それには及びませんよ。仕方ない、出直すとしましょう」

老人はそう言っただけで踵を返そうとした。

「ちよつと待ってください!!」

それまで座って応対していたそらがバネ仕掛けの人形のような勢いで立ち上がった。驚いた老人は激しく目を瞬かせた。

「ど、どうされましたかな？」

「あの……縮刷版でなくちゃいけないんですか？」

「……はい？」

「その、ここには書籍の縮刷版だけじゃなくて、マイクロフィルムもあるんです。通常は閉架書庫にあつて、一般の閲覧は受け付けてないんですが。でも、もし」

そらはそこで言いよんだ。老人の名前を知らなかったからだ。

「ご入用でしたら、出してきますけど」

「あ、いや……」老人の顔に困惑の表情が浮かんだ。「いや、やはりそれは。貴女だつてお忙しいのに、ご迷惑をかけるわけには」「迷惑だなんて、そんな。それがわたしの仕事ですから」

「しかし……」

言葉を探すような短い沈黙をそらは遠慮だと思った。なので、それ以上の議論を打ち切るように微笑んでカウンターから回り出た。

ちようと受付に戻ってきた同僚の尾崎さつきに後を頼むと合図を送ると、そらは恐縮する老人を伴つて閉架書庫に向かった。

そらは女性にしては長身で、並んで歩くと2人の身長差はほとんどなかった。どちらも165センチを少し越えた程度だろう。老人は鉄紺色の袴姿の上から漆黒の天鷲絨のインヴァネス・コートを羽織っている。足腰に不自由のある歩き方ではなかったが、黒檀のような素材で出来た太い杖を手にしていた。ただし、老人の杖には普通の杖にはあるT字型の握りの部分がないため、見た目はやや太目の真つ直ぐな木の棒なのだが。老人がそれを左手に収めて歩く姿を、そらはまるでタイムスリップしてきた三河のお侍さんみたいだなと思つた。

職員しか出入りしない奥まった一画にある書庫の扉を開けると、唐突に図書館の匂い 或いは古本屋の匂い としか形容しようのない埃と黴臭さの入り混じった匂いが鼻をついた。同時に思わず身体が縮み上がるような冷気が吹き付けてくる。

(うつわ、カーディガンくらい着てくれればよかった)

そらは声に出さずに呟いた。

市立図書館を中核施設に持つ岡崎市図書館交流プラザは真新しい建物で、館内は空調が行き届いている。だが、それは図書館や同居する市民センターなどの人が出入りするスペースとオフィスだけで、倉庫にまで暖房が入っているはずはなかった。

だが、わざわざ着るために帰るほどのことでもない。そう意を決して、そらは閉架書庫に足を踏み入れた。

広々としたスペースに整然と書架が並ぶ館内とは裏腹に、閉架書庫は古くから営業している古書店のように雑然としている。旧図書館からの引越して持ち込まれた書籍や資料の中には「どうせ公開しないものだから」という理由でダンボールに入れっ放しで“保管”されているものまである。

「ほう、これが図書館の裏側ですか。何と言うか、想像していたとおりですな」

老人は感心したように言った。

そらは適当に「……ええ、蔵書の数が多いですから」とごまかしたが、子供のように興味深そうに辺りを見回す老人の仕草に恥ずかしさを押し殺すのに必死だった。倉庫がゴチャゴチャな理由は単に職員の手が回らないというだけだからだ。

先日、行われた会議では休日に職員総出で整理をするべきだという声も上がった。勿論、公務員が半数以上を占める職場でそんな意見が通るはずもなかったが。

「ええっと、確かこっちのはうのはずなんですけど」

そらは課長が「せめてどこに何があるかの目星くらいつけておこう」と言っ作つた見取り図を片手に、スチール製のキャビネットの間を歩いた。

「ああ、ありました。これですね」

目当ての地方紙のマイクロフィルムが見つかった。

マイクロフィルムというと非常に小さなものが想像されることが多い。だが、それはあくまでも言葉からの印象にすぎない。縮刷版でいうところの1ページを1枚のフィルムに収めるのだが、それでも単純計算で月にして1488ページ 朝刊32ページ、夕刊16ページで31日分 にも及ぶ。

従って、そのケースはそれなりの大きさになる。そらが捜していた地方紙のフィルムも百科事典ほどの分厚さのケースに収められていた。それが棚の最上段にかなり力任せに押し込んである。

そらは踏み台を持ってきてケースに手を掛けた。しかし、引っ張り出そうとして「あれっ？」と素っ頓狂な声をあげる。

「どうされましたかな？」

「い、いえ。引っ掛かってるんですかね……」

引っ掛かってるわけではなかった。無理やり押し込んであるのと、湿気のせいでケース同士が貼り付いているのだ。

それでも何度か押ししたり引いたりしているうちに動くようになってきた。学生時代は陸上選手で身体は鍛えていたし、今は夫の実家の農作業を手伝いに行く関係で、そのスレンダーな体格とは裏腹にそらの腕力はそれなりのものだった。さらに前後に揺すっているうちに張り付いていたケース同士が剥がれる手ごたえを感じた。

「よっし、せーのっ」

そらは殊更大きな掛け声をかけた。 その刹那。

「危ないッ!!」

老人の声がそらの耳をつんざいた。

何が起こったか分からないまま、そらは床に薙ぎ倒されていた。それと同時にドスンという重い音が立て続けにした。

「……えっ？」

プラスチックタイルの感触がそらの背中と尻に冷気を伝えてくる。自分が立っている状態から、今は横になって倒れていることは理解できたが、その割には床に叩きつけられたような痛みはほとんどなかった。代わりにあったのは力強い腕に抱き寄せられている感触だ。

った。

そらは反射的に固く瞑っていた瞼を開いた。最初に目に入ったのは自分の身体に覆い被さるインヴァネス・コートの黒い生地だった。「大丈夫ですか？」

錆を含んだ声がそらの耳朶を打った。

そらはようやく何が起こったのかを理解した。力任せにケースを動かしたせいでキャビネットが揺れて、上に乗っていた段ボールが落ちてきたのだ。この老人が身体ごとぶつかって自分を押し退けてくれなかったら、そらは頭のとっぺんでそれを受け止める羽目になっていたところだった。

老人は身体を起こしてそらをゆっくりと抱き起こした。

「す、すいません!! あん……お怪我は？」

「私は何も。貴女は？」

そらは自分の身体を点検した。固い床に押し倒されたので背中や尻に少しくらい打ち身があるかもしれないが、それは怪我のうちには入らないだろう。

「大丈夫みたいです。結構クッション効いてるんで」

そらは尻をさすりながら言った。ずれた眼鏡を慌てて戻すと自然と照れ笑いが浮かぶ。

老人はそんなそらをじっと見つめていたが、やがて、皺の間に消えてしまうほど優しく目を細めて「それはよかった」と言った。

大きな物音は受付の奥にある司書課の部屋にまで轟いていた。

「えっ、なににッ!？」

そらが閉架書庫に行ったことを知っていた同僚の尾崎さつきは、閲覧室の扉を蹴破らんばかりの勢いで書庫に駆け込んできた。普段は淑やかなタイプだが、動転したときや体調が悪いときなどは被っている特大の猫の効果が薄れるのか、こうやって地が出てしまうことがある。そらはその落差を見るたびに「コイツはぜったい二重人格だ」と確信してしまう。

「大騒ぎしないでよ。棚の上の荷物が落ちてきただけなんだから」

「だけって……あんた、怪我は？」

「してないよ。このひとが助けてくださったから」

そらはまたしても言いよんだ。老人の名前をまだ訊いていなかったからだ。

老人の方を振り返ったそらは目を丸くした。

「ちよつと、大丈夫ですか!？」

起き上がって服の埃を払っている間は何でもないような顔をしていたのに、老人は左の手首を押さえて顔をしかめていた。身体に似合わない大きな手が押さえている辺りがサツマイモのような紫に変色している。

「どうしたんですか？」

「どうやら、身体を支えようとしたときに床に手をついてしまったらしい。捻挫だと思っんですが……」

「骨が折れてるんじゃないんですか!？」

「いや、それはなさそうです。それでも怪我には慣れていてね」

「なに呑気なこと言ってるんですか、そんなに内出血してるじゃない

いのですか!」

呻き声に似た苦しげな響きはあったが、老人は事もなさそうな口調を崩さなかった。左手の指を曲げ伸ばししているのは骨や靭帯に異常がないことを確かめる仕草だった。

すっかり動転してしまつたそらに代わつて、さつきが内線電話で上司に事情を説明した。すぐに救急車を呼ぶというので、そらと老人の2人はエントランスへ急いだ。

「すみません、却つてご迷惑をおかけして」

「そんな、迷惑だなんて。わたしのほうこそ助けていただいたのに、こんなことに……」

このひとが助けてくれなければ、病院に運ばれたのは自分だったかもしれない。

そらはゾツとする思いを抑えられないでいた。落ちてきた段ボールには頑丈なプラスチックケースに収められた古い8ミリフィルムがぎつしり詰まっていて、重さは軽く10キロを越えていた。脳天を直撃していたらタンコブ程度では済まなかつただろう。良くて脳震盪、最悪の場合は命に関わつた可能性すらある。

整形外科への車中は互いに自分の非を認めあう不毛なやりとりか、そつでなければ気まずい沈黙に支配されていた。

診察の結果は全治2週間の捻挫だった。幸いにも骨や靭帯に損傷はなく、内出血もすぐに収まるだろうとのことだった。それを聞いて、そらはようやくホツと胸を撫で下ろした。

それでもしばらくは動かさないほうがいいということ、老人はギプスで固定された左前腕を三角巾で吊つた格好で診察室から出てきた。和服の上からなので窮屈に見えたが、袖の無いインヴァネス・コートはこういうとき、そのまま肩から羽織れて便利だと老人は笑つた。

診察代の精算が終わるまでの間、老人とそらは待合室の長椅子に並んで座っていた。館内での事故なので治療費は図書館側で負担すると課長から言われていたが、そらは自分で払うつもりだったので、

愛用のフェンディの財布を握り締めたままだった。

何か話しかけなきゃ、とそらは思った。しかし、話題は思い浮かばなかった。本当は興味を覚えていることが一つある。ただ、それを訊いていいのかどうか、そらには判断がつかなかった。

なので、他のことを訊いてみることにした。

「段ボールが落ちこちてきたとき、草薙さん、わたしの近くにはいらっしやいませんか？」

草薙というのは老人の苗字だった。下の名前は伊織。左利きだというので病院の受付はそらがしていた。「なぎ」の字は危うくタレントと同じ字を書きそうになったのだが、草薙がさりげなく保険証を目の前に滑らせたおかげでそらは恥をかかずに済んでいた。

草薙は少し怪訝そうな顔をした。

「そうでしたかな？」

「はい。そうだから、棚の上でモノが揺れてるのにも気づかれたんでしょう？」

はつきり見ていたわけではなかったが、自分が草薙を入口辺りに残してさっさと書庫内を見回っていたことをそらは覚えている。貼りついたケースと悪戦苦闘していたときにかげられた声もそんなに近くからはなかったはずだ。傍から声をかけられたのなら逆に驚いただろうから、それは間違いない。

「そういうことになりますな。それが？」

「いえ、それなのによく落ちてくるのに間に合ったなって思ってた。奥歯に加速装置のスイッチがあれば話は別だけど、とバカバカしい考えがそらの脳裏をよぎった。

「あれですか。あのとき、私はちょうど棚の曲がり角辺りにいた。あなたとの距離はそう……2間半ほどでしたか」

「……？」

そらは首を傾げた。間けんという単位が分からなかったからだ。

「お若い方には通じませんか」

「そんなに若くないですけど……。すみません、不勉強で」

草薙は苦笑いを浮かべただけでその卑下をやり過ぎた。

「一間はおよそ1・8メートル。畳の長辺とほぼ同じ長さです。ですから、あのときは5メートルほど先だったことになりませんか」

そらは待合室の床を見た。

プラスチックタイルの1辺はおよそ30センチ。部屋の面積を手取り早く計算するときの基準になる、と損保関係の仕事をする夫から教えてもらったことがある。それによれば2間半先は単純計算でタイル15、6枚も向こうだった。そらにはそれが途轍もなく遠くに見えた。

「剣道の試合だとそれくらいの距離を詰めるのは……私はあまりやりませんが、遠間からの飛び込み面だと1呼吸半といったところですよ。一方、落ちてきた荷物ですが、あのときのタイミングだと落ちてくるのに2呼吸かかる。ですから、ギリギリで間に合うと判断したわけです。まあ、実際にはそこまで冷静な計算をする余裕はなくて、ただ、危ないと思った瞬間に身体が動いていたというだけなのです」

「はあ……」

そらは嘆息した。

理屈は分かる。しかし、それは結局のところ、わずか半呼吸分のタイムラグに賭けたギャンブルだったわけだ。それを目の前の小柄で痩身の老人が成し遂げ、あまつさえ、体格だけならほぼ同等の自分を押し倒し、しかもその身体が床に叩きつけられないように腕を挺して庇ったのだという事実にはただ驚くしかなかった。

支払いを終えて、2人は病院のエントランスを出た。

外はすでに日が暮れ始めていた。内陸部で山が多いこの街の2月はとんでもなく寒い。寒風というより冷気の塊が押し寄せてきているような気すらする。ひときわ身がすくむような突風を首をすくめてやりすごして、そらはタクシー乗り場まで草薙を送った。

「そつえば草薙さん、お杖は？」

「杖？」

「ええ。ほら、ずっと左手にお持ちだったじゃないですか」

草薙はそれに今気づいたというようにキョトンとした顔をしていました。

「これは失敬。あの部屋に忘れてきたようですね」

「でしたら、それも後でお届けしますね。草薙さんのお車も御宅まで運ばなくちゃいけませんし」

そらは草薙の治療中に上司とかわした電話の内容を思い出した。

「そらさあん、あれはマズいよお」

課長の声は誰かに聞かれるのを怖れるようなヒソヒソしたものであった。この男は正規職員の女性はちゃんと苗字で呼ぶが、そらのように囑託契約の職員は馴れ馴れしく名前で呼ぶ。広義ではそれもセクハラになり得るのだが、実害と言えるほどのことはないので放置しているのが実際だ。

「何がですか？」

「草薙氏の車だよ。ほら、君が家まで運んでいってくれと言っただる？」

実は救急車を待っている間、草薙は病院が近くなら自分の車で行くこうとそらに提案していた。自分で運転できる状態ではないのでそらに運転を頼めれば、とのことだったのだが、そらはペーパードライバーなので無理だと断わっていた。

「お願いしましたけど。それが何か？」

「アストンマーチンなんか、怖くて誰も運転できないよ」

「アストン………なんですか？」

そらの声が怪訝そうにひそまった。

「アストンマーチンDB5。007のサンダーボール作戦に出たボンド・カーだってさ。知ってる？」

昔の007など見ていないがサンダーボール作戦がシヨーン・コネリー時代の作品であることはそらでも知っていた。だとすれば、

かなり昔の車ということになる。

「それ、高いんですか？」

「詳しいことは分かんないけど、フェラーリを買ってもお釣りがくるって話だね。とにかく、そんなの運転していつてぶつけでもしたら大変だよ」

「なるほど」

(それは誰も乗りたがらないだろうなあ)

しかし、責任を取って自分が運ぶわけにもいかない。そんなことをしたが最後、目的地に着いたときにアストンマーチンとやらが車の形をしているかどうか、まったく保証できないからだ。

そらは知り合いの自動車屋に相談することにした。母親が経営しておる小料理屋の常連に外車の輸入販売を手がけている男がいるのだ。そこならば外車の運転に慣れたスタッフがいるだろうし、うまくいけば荷台に乗せて運ぶトラックを貸してくれるかもしれない。

こつちで何とかします、とそらが宣言すると、課長は小心者らしいあからさまな安堵の溜め息を洩らした。全ての元凶はそら自身なので文句は言えないが、こんな上司の下で働いていることに幾らかの落胆を覚えずにいらなかった。

そらは母親の携帯電話を鳴らした。用件を伝えると母親は「あんな、なにやってんの？」とブツブツ文句を言いながらも件の自動車屋に連絡をとってくれることになった。

「後でちゃんと事情を説明しなさいよ」

「はいはい」

「返事は一回」

母親はいつものようにそらを子供扱いしながら電話を切った。言い返したいことは山ほどあるが、残念ながら今回の件については何も言える材料はなかった。そらは携帯電話のマイクに向かって盛大な溜め息を送り込んだ。

自分の知らないところでそんな会話がなされていたなど知る由もなく、草薙は遠慮がちな笑みを浮かべた。

「そんなにお気遣い戴くほどのこともないのですがね。この腕ではしばらくは車も運転できませんし、例の棒を振ることもできません。

いや、そういうつもりで言ったではありませんが」

その表情が一気に曇ったのを見て、草薙は右手を小さく掲げてパタパタと振った。

その子供じみた仕草はほんの少しではあったがその心を和ませた。罪悪感は一向に薄れる気配はなかったが、それを表に出すのは却って老人の負担になる。それに気づかないほどそらは子供ではなかった。

「あれって杖じゃないんですか？」

杖らしくないとは思っていたが、草薙の言葉の端々に剣道の用語が出てくることにそらはある種の確信を持ち始めていた。

「杖ですよ。表向きはね。しかし、実際は護身用の木刀です。

小判型になってますので、何度か警察に注意されたことがあります」

小判型の意味が分からないそらに、草薙は木刀の断面のことだと説明した。

普通の杖の断面は正円形をしている。しかし木刀は日本刀を模したもののため、その断面も楕円形に近い形をしている。黒檀の木の棒を持ち歩く老人を見つけた警察にしてみれば、それが杖であるか木刀であるかは大きな違いというわけだ。

ちなみに本物の刀のように反った形をしていないことはあまり言い訳の材料にならない、と草薙は付け加えた。流派によっては直刀を使うところがあるし、それだけでなく鍛錬用に振る棒は真っ直ぐなものが多い。第一、剣道で使う竹刀は真っ直ぐで刀のように反ってはいない。

「年甲斐もないと言われることもありませんが、何と申しますか、あれを持っていただけで安心するのですよ。まあ、それでなくても最近は何と物騒ですから。アレは何と言いましたかな。オヤジ」

「オヤジ狩りのことですか？」

「そうそう。私に言わせれば、あっけなく狩られるほうにも問題があるような気がしますが、しかし、この平和な時代にあんな愚連隊のような連中を相手にする術を、世の中の誰もに身につけておけないのは無理な話なのでしょう」

「そうですねえ」

そらにしてみても、今の若者が自堕落で世の中を舐めきっているのは大人がだらしくなってきたのが原因だと思わないではない。しかし、草薙が言うような、あるいは実践しているような誰もが自分の身は自分で守れる世の中というのもあまり現実的ではないだろうし、それはそれで暴力のエスカレーターを招くだけのような気もした。

乗り場に空車のタクシーが入ってきて、草薙はその後部座席に乗り込んだ。

「それじゃ、お車と杖は後でご自宅にお届けしますね。と言っても、運転するのはわたしじゃありませんけど」

「樋口さんは運転はまったくですか？」

「さつきも言いましたけど、完全なペーパードライバーなんです。夫が運転させてくれないんで。少し前に九州までドライブしたんですけど、最初のパーキングエリアで交替させられました」

「ほう？」

草薙は可笑しそうに目を細めた。そのからかうような視線にそらは軽く頬を膨らませたが、やがてそれは照れ笑いに変わった。

「それではまた後日。今度は縮刷版が見られると良いのですがね」

「来られる日をご連絡ください。お取り置きしておきますから」

「そんなサービスがあるんですか？」

「草薙さんだけの特別サービスです。それじゃあ、お大事に」

「ありがとうございます。では、また」

草薙はそう言って、行先を告げるために運転手に向き直った。

手にしていた木刀と同じように真っ直ぐで厳めしく、それでいて物静かな印象も与える不思議な横顔にそらはしばらく見入っていた。

「お手数をおかけしました。……いえ、こちらこそ。どうもありがとうございました」

そらは受話器を下ろした。

母親が手配してくれた自動車屋から、草薙のアストンマーチンを無事に彼の自宅に運び終えたとの連絡だった。草薙の杖　　というか、木刀　　もその助手席に載せられていつていた。

本当はきちんと最後まで付き添いたかった。

しかし、草薙のマンションは岡崎市と豊田市の境に近い郊外にあつて、そこまで着いて行つては帰りが遅くなりすぎてしまう。住所を確認するためにかけた電話でも「心配には及ばない」と念を押されたこともあつて、そらは自宅に帰っていた。

そらは携帯電話を手に取った。メモリには草薙の番号が登録してある。利き手を怪我しては何をするにも不便に違いないと思つて半ば強引に交換した番号だったが、掛かつてくる気配はなかった。

(やっぱり着いて行けばよかつたかな)

そつ心の中で呟いて、そらは自分が過剰に気を揉んでいることに気づいた。草薙にだって家族がいるはずだ。それなのに自分が押しかけていっては却つて話をおかしくしてしまうだろう。

小さな溜め息と共に携帯電話を充電器に載せた。同時にバスルームの扉が開いて夫の喬生が出てきた。

「どうだった？」

そらとはちょうど一回り違いの40代半ば。歳相応に渋さのある中年顔なのだが、愛嬌のあるまん丸な垂れ目のせいで悪戯っ子のよ

うな印象を与えている。誰に似ているかと問われれば10人中10人がジャン・レノと答えるに違いないが、当の本人は後退する一方の前髪を揶揄されていると思っただけであまりいい顔をしない。

「ちゃんと届いたって」

「そりゃ良かった。今度、菓子折りでも持ってお礼とお見舞いに行かないとね。ウチのそらがお世話になりましたって」

「子どもじゃあるまいし」

そうは言いながらも、そらの表情は少し綻ぶ。

「ご飯にする？」

喬生は「そうだね」と言いながら頷いた。タオルで頭を拭いながらリビングに出てきて、テーブルにおいてあった眼鏡をかける。丸みのある眼鏡をかけると更にジャン・レノに似てしまうのでしばらく角ばったボックスフレームにしてみたが、似合わなかった。先日作ったものから以前の丸眼鏡に戻している。そらはそちらのほうが断然好みだったので秘かにほくそ笑んでいる。

「今夜のメニューは？」

「ハタハタのお煮つけとれんこんのキンピラ、玉ねぎとジャガイモの味噌汁」

「おつ、和食だねえ」

喬生がメタボリック症候群気味なこともあって、樋口家の食卓における魚の割合は急速に上昇している。独身時代は肉と魚では間違いない肉を選んでいた喬生は、正直に言えば当初は不満だった。しかし、近ごろははそらの煮魚の味付けがいい塩梅になってきたこともあって、魚も悪くないと思いはじめている。

夫婦生活とはすべからず慣れること。そらの母親がいつぞや、それができずに最初の結婚に失敗した娘婿に語った一言だ。

「食べよっか」

「あ、できたらその前にビールを一杯」

「ちよつとお。それじゃ、ウォーキングしてきた意味ないじゃない」

「そこを何とか」

喬生は顔の前で小さく手を合わせて微笑みながら、お願いしますのポーズをとる。

「もう、しょうがないなあ。それじゃなくても、今の季節は汗が出ないって言うてなかった？」

「汗は後でベッドでかくよ」

「ホント？ 最近、週末しかしてくれないから、ちょっと欲求不満なんですけど？」

そらは切れ長の目で喬生を睨んだ。喬生には子どもっぽく見えることも多いそれも、こういう表情をするとやけに艶がある。

「新婚のときみたいには言わないけど、せめて週2はペースとして守って欲しいな」

「その件につきましては前向きに検討させて戴きます」

「なによ、それ。政治家みたい」

「まー、そのー」

喬生は伏目がちのしかめっ面に下唇を突き出す、本人だけが似ていると思っている田中角栄の顔真似をした。数え切れないほど見せられているのに我慢できず、そらは盛大に吹き出した。

その夜、約束どおりにベッドでたっぷり汗をかいてから、そらはもう一度、閉鎖書庫での出来事を喬生に話していた。

「……そうかあ。僕としてはそらに怪我がなくて何よりだけど、素直に喜んでもらえないね」

喬生は腕枕の上にちょこんと載せられたそらの顔を見やった。

最近買いなおしたばかりのダブルベッド。前のセミダブルは以前に住んでいたマンションの部屋に合わせて買ったものだったが、学生時代からスポーツマンでガツチリした体格の喬生とお世辞にも小柄とは言い難いそらにはやや窮屈だった。引越すときにそらが拳げた部屋の条件の一つは大きなベッドが置けることで、今のマンシ

ヨンはそれを充分に満たしていた。それから半年、ようやく夢がかなったというわけだ。

「そうなんだよね……。でも、何かできるってわけでもないし」

「そのお爺さん、何て言っただけ？」

「草薙さん。下の名前は伊織っていうんだって。時代劇の人みたいだよ」

「伊織って確か、宮本武蔵の息子の名前じゃなかったかな」

「そうなんだ？」

「そらは仰向けだったのを小さく身を擦って、喬生のほうに向き直った。」

「イメージにはぴったりかも」

「木刀持ち歩いてるんだろ。本当に武士の末裔なのかもね」

「でも、車はイギリスのなんだよ。すっごく大きくて、なんていうのかな、エレガントな感じの銀色でね。課長がすごい高級車だっけって言ってたけど」

「何て車だい？」

「えっとね、アストンマーチン。そう、アストンマーチンのDB5っていうの。007に出てくるボンド・カーと同じクラシック・カーなんだって。って、あれ？」

「そらは喬生の顔を覗き込んだ。喬生は訝しげに眉根を寄せていた。『どうかした？』」

「いや、ウチのお客さんでアストンマーチンに乗ってる人がいるんだけど」

喬生が勤めている損保代理店では自動車の保険も扱っている。西三河では指折りの大手代理店であり、管理職の喬生とて扱っている契約のすべてに通じているわけではないが、それでも特異な契約に関することは耳に入ってくる。

数年前、喬生の部署に契約している特約店からクラシック・カー保険について問い合わせがきたことがある。そういう保険の存在は知っていたが実際に取り扱ったことはなく、また市場価格などあっ

てないような英国製高級車の車両保険の基準額を幾らにするか、喬生の上司である部長と保険会社の担当者が電話口で答えの出ない議論を続けていた様子をよく覚えていた。それに元よりアストンマーチンは誰でも乗っているという類の車ではない。

「とうことは、そらを助けてくれた草薙さんってのは、あの草薙さんなのか」

「喬生さん、知ってるの？」

「知ってるも何もお得意さんだよ。しかも社長の担当顧客」

喬生の会社では財界の大物や政治家、大企業の社長一族に限って、社員ではなく社長自らが直接担当する慣習になっている。

「そんなに偉い人なの？」

「そら、クサナギ精工って知ってるかい？」

「聞いたことあるような……ああ、豊田にそんな会社があったわけ。高校の同級生が勤めてるはずだけど　って!？」

そらの目が驚きに見開かれた。

「まさか、草薙さんってあそこの社長さんなの？」

「そうじゃない。いや、10年くらい前まではそうだったんだけどね。本社が関東に移転したのと一緒に東京に行ってたそうだけど、5年くらい前にリタイヤしてこっちに戻ってきたって聞いてる。経営からは身を引いたそうだけど、今も筆頭株主なんじゃなかったかな」

「そうなんだあ……」

それからしばらく、喬生は草薙の会社について自分が知っていることをそらに話した。

「要するに草薙さんの会社って電器屋さんなの？」

「ちょっと違う。家電メーカーじゃないから、直接には僕らの目に触れることはないね。でも、そういったものの中に使われてる部品にはクサナギ精工のものもある。特許を持ってたり、国内では作れるメーカーが他にないからってほぼ寡占状態のものもあるんだって」

「へえ、すごいんだあ」

「そうだね。でも、本当にすごいのはそこじゃない。元々、クサナギ精工は精密工作機械を作る会社なんだ」

「精密……工作機械？」

「精密な部品を作るための機械　っていうと分かりにくいけど、ほら、精密な部品を作るためには作る側の機械が精密に動いてくれないと困るだろ？」

そらはコクリと頷いた。

「そりゃそうだね」

「草薙さんここで作ってるのは、そういう物凄い精度で動く工作機械なんだ。ヨーロッパの機械メーカーが直接買い付けに来たり、アメリカに輸出してたりで、どっちかというと国内よりも海外で評価が高いらしいんだけどね」

「へえ……」

もはや感嘆するしかない。そらは機械モノが好きで喬生が興奮気味に話すのを聞きながら、脳裏に草薙伊織の横顔を思い浮かべていた。そういう経歴の持ち主だと言われれば、確かにお大尽の貫禄を漂わせていたような気もする。着ていた和服も安物っぽくはなかった。木刀が銘のある逸品なのかどうかはそらには分からなかったが。

「でもさ、そら？」

「なあに？」

「そんな会社の元社長が図書館に何の用事があったんだろうね」

「こら、図書館をバカにするなあ」

「バカにはしてないよ。でも、わざわざ図書館で本を借りなくたって、イオンモールにいけばバカでかい本屋があるだろ」

「新聞の縮刷版を見に来てたんだよ」

「縮刷版？　何でまた？」

「……それは知らないけど」

「でも、それだって今ならインターネットで新聞社のデータベースにアクセスしたほうが早いんじゃないのかな」

「そういうの、苦手なのかもよ？」

「コンピュータ制御の機械の設計をやった人が？」

「知らないよ、そんなの」

しかし、喬生の言いたいことは理解できた。そら自身も不思議に思っていたことだからだ。仮に草薙がインターネットをうまく扱えなかったとしても、周囲に代わりにやってくれる人など幾らでもいるだろうに。

それと昭和57年の2月という、すぐには何があった月か分からないほど昔の新聞から草薙が何を知ろうとしていたのか。病院の待合室で訊きそびれた事柄は、その胸の中で静かにわだかまっていた。

「そら、そんなアンニュイな顔してどーしたの？」

図書館交流プラザの2階にあるカフェで食後のコーヒーをすすっている、尾崎さつきが声をかけてきた。

2人は職場の同僚である以前に中学校の同窓生でもあった。尤も同じクラスになったことはなかったし、当時は友人ですらなく記憶もほとんどなかった。後になってさつきが同じ司書課に配属されてきたときも、そらはすぐに思い出せなかったほどだ。

打ち解けるきっかけになったのは「互いに名前がひらがな」という他愛もないものだったが、今ではまるで旧年来の友人のように付き合っている。ただし、職場では互いに苗字で呼び合い、名前で呼ぶのは周囲に誰もいないときだけだ。

「ちよつとねえ」

「元気ないよ。心配事でもあるの？」

「うーん、そういうわけじゃないんだけどさあ」

「あ、分かった。あのサニー・チバみたいなお爺さんのことでしょう？」

「変なあだ名つけないでよ」

そら是因为息混じりにさつきを睨んだ。さつきが木刀に引つ掛けて言っていることは分かっていたが、草薙伊織は千葉真一が演じる柳生十兵衛のように偉丈夫でもワイルドでもない。

あれから1週間が過ぎていた。

草薙はあの日以来、姿を見せていなかった。具合が悪いというわけではない。3日目にそらは様子伺いの電話を入れていたが、そのときには何も問題はなく、ようやく箸を持てるようになったと受話器の向こうで笑っていたからだ。夫がお礼を兼ねてお見舞いに伺い

たいと言っていると言っても、そんなに大げさな話ではないと丁重に断わられていたくらいだった。

「忙しいんじゃないの？」

「そうなんだろうけどさあ。でも、気になるじゃない？」

「何が？」

「いや、利き腕を怪我してて不自由じゃないのかとか、実はそのことで後から腹が立ってきて、あたしのこと、もう顔も見たくないって思ってるのか」

「考えすぎだつてば」

さつきはそらの心配を一笑に付した。

「そんな心の狭い感じの人じゃなかったし、こう言っちゃなんだけど、怪我したこと自体は本人の行動の結果でしょ？」

「そうだけど……」

「だーいじょうぶだつて。そのうち、また来てくれるよ。それに、あの人つて新聞の縮刷版を見に来てたんでしょ？ あれはどこにあるってモンじゃないから」

「そっかなあ」

縮刷版は確かに安いものではないが、草薙の財力であれば新聞社から直接購入することもできる。それも草薙がそんな男だとは思っていなかったが、人の心というのは分からないものだとも思っていた。

「そんなに心配だつたら、直接家まで行けばいいじゃん」

さつきは事もなさに言う。そらは驚いたように目を見開いた。

「えーっ、そんなことできないよ」

「どうして？」

「だって、奥さんが出てきたらどうすんのよ。申し訳ありません、おたくのご主人の怪我の原因を作った者ですがつて言うの？」

「ちよつと待つてよ、そら。旦那さんといっしょにお礼に行ったら、同じこと言わなきゃなんないんだよ？」

「そーなんだけど、やっぱ1人じゃムリだよ。さつきが着いてつて

くれるんだったらいいけど」

「おいこら。その歳で十二甘えてんのよ」

さつきはそらの額をコツンと小突いた。

「それよりもさ、気になってることがあるんだよね」

「なに？」

「ねえ、さつき。昭和57年の2月って何があった月か、覚えてる？」

「……57年ってえと1982年か。あたしもあんたも幼稚園児だよ。それがどうかした？」

そらは1週間前の出来事をもう一度最初から説明した。

「じゃあ、その草薙ってお爺さんは、57年の2月のことで何か知りたかったってわけ？」

「そうとは限らないけどね。何か思い出して、当時の新聞記事が読みたくなつたのかもしれないし」

「草薙さんってクサナギ精工の社長なんですよ。当時の株価とか会社に関することじゃないの？」

「それだったら自分で図書館に来なくても、会社の人に調べさせればいいじゃない。それはないと思う」

「うーん……」

さつきはしばらく首を捻っていたが、やがて、思い立ったように顔を上げた。

「調べに行こうか」

「えっ？」

「だって、草薙さんが知りたかったことって新聞に載ってるんですよ。だったら、新聞社のデータベースを検索してみればいいじゃない」

「ちょっと待ってよ。それ、幾らかかると思ってたの？」

「だーいじょうぶ。ウチの旦那、何の仕事してるか知ってる？」

「……あ、そうだね」

さつきの夫は工業系の新聞社で記者をしている。元々は神奈川で

知り合った2人なのだが、夫が名古屋支局に転勤になったため、3年前に帰ってきているのだ。新聞社は互いのデータベースにアクセスし合うことにいい顔をしないため、データベースのアカウントは個人名義でとつてあることが多く、さつきの夫もそれを持っていた。2人は受付の裏手にあるスタッフルームのパソコンの前に陣取った。図書館内にもインターネット席があるのだが、予約制である上にアクセス制限が掛かっていて、調査関連の無料サイトしか閲覧することができないのだ。

「さてと、まずはその前に」

さつきはウィキペディアのメインページを開いた。ネット上の百科事典であるこのサイトは情報の信憑性に若干の不安はあるものの、調べものをするときには非常に有用で、そもそも何度か使ったことがあった。

「何するの？」

「まずは、その年の概要くらい掴んどかないとね」

さつきがキーボードを叩くと、画面に「1982年 出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』」と表示された。その下には「西暦（グレゴリオ暦）1982年は、金曜日から始まる平年」とも記されている。

「そうなんだ」

「そうなのよ。まあ、そんなのどうでもいいけど。何月って言ったっけ？」

「2月」

さつきは「できごと」というリンクをクリックした。画面がジャンプしてずらりとこの年の出来事とその日付が羅列される。一番上は「1月15日・広島市の電話市外局番が3桁化され「082」となる。」だった。

昭和57年2月に起きた事件は「ホテルニュージャパン火災発生で33人死亡」と「日本航空350便墜落事故、24人死亡」という痛ましい事故が2つ、それと「岡本綾子がゴルフのアメリカLP

GAツアーで初優勝 というおめでたいものが1つだった。そらやさつきにとつてはいずれも記憶にあるような、ないような微妙な位置づけの事件だった。それ以前にそらには岡本綾子が誰なのかがよく分からなかった。

さつきは航空機事故のページをクリックした。

羽田沖で日航機の機長がエンジンを逆噴射させて墜落した人為的な事故だった。当時はまだ心神喪失というものに理解が乏しく、新聞記事でも機長は実名報道されていたと記述は伝えている。現在ではこのような実際の事件をパロディにするのは不謹慎とされ忌避されるが、当時はそれほどではなかったらしく「逆噴射」や制止しようとした副操縦士が叫んだ「機長、やめてください！」が流行語になったとも記されている。

「……あー、これ、知ってる。ウチの旦那の両親が乗るところだったらしいんだよね」

「そうなの？」

「うん。九州に旅行に行った帰りだったんだけど、たまたま、お義母さんの忘れ物を取りに帰ったせいで乗り遅れて、それで助かったんだって」

「惜しかったね」

「そうだね」

2人はニコリともせず言い放った。お互いに嫁・姑問題では苦労させられている同志だった。

当時、草薙の会社の本社は東京にあった。しかも、国内よりむしろ海外で評価が高かったという喬生の話からすると、アジア方面から福岡経由で該当の飛行機に乗るはずだった可能性はある。しかし、それが30年近く経って新聞で読み返したくなる記事であるとはそらには思えなかった。

「それを言うなら、こっちの火事だってそうだよね」

「そうだけど……」

ホテル・ニュージャパンの火災は日航機の墜落の前日に起こって

いる。こちらでも東京都内の出来事であり、当時、東京在住だった草薙に何かの関係があってもおかしくはないが、こちらでもわざわざ思い返したくなる出来事だとは思えない。

岡本綾子についてはそもそもさつきも大したことは知らないのでもとも言えないが、草薙にはゴルフのイメージがあまりないという点で意見は一致した。少なくとも、プロゴルファーの動向に興味があるようには見えなかった。

「ってことは、やっぱり個人的な出来事なのかな」
「そらは大きく息を吐いた。」

「そうじゃなきゃ、ここでは取り上げられてない事件だろうね。この年の2月に起きた事件が3つってことはないだろうから。さ」と、それじゃあ、データベースにアクセスするか」

さつきは検索エンジンから新聞社のサイトに移り、会員制の記事閲覧のページを開いた。アカウントを入力するところまで操作にはまったくよどみがない。

「……ずいぶん慣れてるね」

「まあね、よく使ってるから」

「それ、旦那さんの会社がお金払ってるんでしょ？」

「課金制じゃないからバレないよ。えーっと、なんて言葉で検索しようか」

「事件のことじゃないなら、自分か家族のことだろうからね。名前がいいんじゃないの」

さつきは検索窓に「草薙」と入力した。

「ヒットはゼロ。どーする？」

「どーしよ。カタカナとか。会社の関連記事かもしれないし」

今度は「クサナギ」と入力したが、同じく反応はなかった。

それからしばらく、そらは思いついたキーワードを並べて、さつきがそれで記事検索を繰り返した。しかし、ヒットする記事はほとんどなく、あっても何の関連があるのか分からないような代物ばかりだった。

「……やっぱダメかあ」

さつきは最後にはエンターキーを乱暴に叩いていた。他の職員の見線を感じて、そらは慌ててそれをやめさせた。

それ以上、粘ったところで成果があるとは2人には思えなかった。そろそろ昼休みも終わる時間になる。サイトを閉じて、2人はスタッフルームを後にした。

「まあ、気にすることないと思うよ。何だったら、あたし、着いてつてあげてもいいし」

何も見つからなかつたことに責任を感じて、さつきはそう言った。そらは軽く首を振った。さつきは着いてきてくれと頼んだそらだったが、本心ではそんなことは思っていなかった。

売店で買い物を済ませてくるというさつきと別れて、そらは児童図書館に向かって歩いた。

草薙さんは何を知りたかつたんだろう？

この1週間というものの、その疑問はそらの頭から離れようとしなかつた。自分の名前に興味を示した老人が遠い昔の何を知ろうとしたのか。それはそらにとって重大な関心事になっていた。

でも、それってプライバシーだよな。

そうも思う。なのに、さつきに唆されたとはいえ、そらは草薙の私的な領域に勝手に踏み込もうとしていた。

足取りは重かつた。何も分からなかつたからではない。自分が興味本位で覗き魔のような行為に手を染めたことに気づいたからだつた。

仕事を終えたそらは岡崎城の近くにある図書館前からバスに乗った。見慣れた通勤路の風景をぼんやりと眺めながら考えを巡らせる。目下の懸案事項はやはり草薙のことだ。

住所は分かっている。岡崎から隣の豊田市に向かう愛知環状鉄道の駅のうち、一番近いのはおそらく北野榊塚駅だろう。車でないと不便な場所だがタクシーを拾えば済む話だ。さすがにこの時間からは無理でも、明日は休みなので朝から出かけられる。幸いと言っては語弊があるが、喬生は昨日から東京への定期出張で留守だ。

付き合いだした当初、そらは喬生に「どうして保険屋さんにそんなにしょっちゅう出張があるの？」と疑問と不満をぶつけたことがある。

そらの言い分に理がないわけではない。喬生の会社の顧客の多くは県内、その大半は三河地方の法人と個人だからだ。一部に県外在住の顧客もいるが、それでも日帰りで充分対応できる距離にある。泊りがけの出張が必要な業務などないはずだ。

可愛らしく頬を膨らませる恋人に向かって苦笑いを浮かべながら、喬生は「仕事の相手は顧客だけじゃないんだよ」と言った。

喬生の会社は独立経営の代理店だが、だからと言って保険会社とまったく歩調を合わせなくて良いわけではない。本社　と喬生たちは便宜的に呼ぶ　の会議に出なくてはならないことも多々あるし、新しい保険商品のセミナーにも出なくてはならない。以前はすべて社長とナンバーツーである部長が交代で出向いていたが、不摂生が祟って入退院を繰り返すようになった社長のせいで部長が身動きが取りづらくなり、そうした業務は喬生に任されることが多くなっている。

それが夫に対する会社の信頼であるのが分からないほど、それも子どもではない。しかし、せっかく買ったダブルベッドでの独り寝の切なさはどうしようもなかった。

（晩ご飯、どうしよっかな……）

そらは心の中で一人ごちた。

そんなことを考えているうちにバスは東岡崎駅前のバスセンターに到着した。

三河地方の中核都市といっても岡崎はそれほど大きな街ではない。高いビルが建っているのも駅の周辺だけで少し歩けば昔ながらの街並みも残っている。幹線道路はむやみに広いが、それも近年の再開発で開けたところだけだ。

喬生とそらのマンションは、そんな駅の南口から歩いて10分ほどのところにある。官公庁や銀行、信用金庫などが立ち並ぶ北口側と違って、駅前再開発で開けてきた南口側には賃貸マンションが多く、そのうちの1つだ。田舎名物の暴走族がロータリー近辺をうるうるすることもあって、そらにしてみれば騒音と治安が気にならないことはなかったが、便利のよさはそれを埋め合わせて余りあると喬生は主張した。

とは言いつつ、そらにとっても喬生とは違う意味で今のマンションは便利がいいのは事実だった。そらの母、河合夕子が経営する小料理屋が北口側にある小さな飲み屋街の中にあるからだ。

喬生の不在のときにそらが顔を出すと、夕子は喜び半分煩わしさ半分の顔をする。嫁いだ娘が訪ねてくるのは母親として勿論嬉しいが、その動機が夕食をたかりにきているという事実を快く思っていないからだ。

そういうときこそ、家で料理の勉強でもしなさい。

夕子はそう言っただけを睨む。

言わんとすることが理解できないわけではない。しかし、誰も食べたくない料理などそらは作りたいとも思わなかった。そもそも、1人ぼつちの食卓が好きな人間はそう多くない。

そして、そらはそれが何より嫌いな人間の1人だった。

そらの父親、河合雄一郎はそらが小学生のときに交通事故でこの世を去った。私立大学の文学部で講師をしながら小説家を目指していた雄一郎はそらの自慢の父親だったが、甲斐性という点ではごく平凡。率直に言えばやや劣っていた。雄一郎の死後は勿論、生前も河合家の家計を支えていたのは母親の店の売上げだった。

しかし、それはそらと弟の真治に子供だけの留守番を余儀なくさせた。歳の離れた幼い弟をあやして寝かしつけた後、1人で食べる作り置きのお食事は子供心にも味気ない代物だった。

勿論、それは子供時代の話だ。母親と仲違いしていた20代の初めの頃、そらは名古屋市内のアパートで1人暮らしをしていた。時折、付き合いっていた男が転がり込んでくることもあったが、数年間の大半をそらは1人で食事をとって過ごした。

ただ、それを本当に美味しいと思ったことは一度もない。パーティ・コンパニオンのアルバイトでせしめた老舗の鮓屋の特上の折り詰めでさえ。

そらはバッグから携帯電話を引っ張り出して、母親の店の電話を鳴らした。

「はい、ゆうこです」

名前を名乗っているのではない。屋号がひらがなで“ゆうこ”なのだ。

「あ、ママ？ あたし」

「あら、どうしたの？」

「うん……。今日、お店ヒマ？」

「トゲのある訊き方ねえ。そりゃ、ウチはそんなに繁盛してませんけど？」

「そういう意味じゃなくて、その……お店に行っていていい?」

「喬生さんと?」

「ううん、一人で。喬生さんは出張」

「あら、そう。相変わらず忙しいのねえ。いいわよ、いらっし

やい」

そらは思わず携帯電話を耳から離して液晶画面を見た。テレビ電話ではないので夕子の顔など写っていないが、そこにいつもと違う母親の様子を見出せそうな気がしたからだ。

「どーしたの?」

「なにが?」

「だって、あたしが1人で晩ごはん食べに行っていていいかって言ったら、いつも怒るじゃない」

「失礼ねえ。たまにでしょ」

同じことだとそらは思ったが口にはしなかった。

「そら、あんた、今どこにいるの?」

「駅前のバスセンター」

「だったら、頼みたいことがあるんだけど。みずほ銀行の近くに新しいお惣菜屋さんがオープンしたの、知ってる?」

そらが引き受けるとも言っていないのに夕子はさっさと用事を切り出していた。こういうところは昔からずっと同じで、そらは店からの電話で用事を言いつけられて、自宅から真夜中の路地をとぼとぼと歩かされたものだ。

「知ってる。昨日のチラシに出ってた」

「食べた?」

「ううん、まだ。それがどうかした?」

「実は昨日のお客さんがスーパー関係のバイヤーさんだったんだけど、ちよつどその話をしてね。ちよつと気になってるのよ。ねえ、何か買ってきてくれない?」

「いいけど……ママ、ひよつとして良いのがあったらパクるつもり?」

「人聞きが悪いわね。参考にするだけよ」

またしても同じことだが言っても無駄だとそらは思った。適当に見繕って買ってくるかと告げて電話を切り、駅方向に逆戻りした。

東が付くという駅名と、愛知環状鉄道に岡崎駅という駅があるせいで分かり難いが、東岡崎駅はこの街の中心駅だ。その駅前はこの時間、家路を急ぐ人々でごった返している。それなのに駅前に唯一あつたスーパーが閉店してしまっていて、市民の買い物は広々とした店舗と駐車場を備えた郊外型の大型ショッピングセンターに依存してしまっている。いわゆるドーナツ化現象だ。

それでもオフィス街にはOLやサラリーマンを見込んだ弁当屋や、仕事帰りの共働きの主婦を当て込んだ総菜店があちらこちらに見取れる。

夕子が言った惣菜屋もそういつた店舗の一つで、昨今のプチ贅沢ブームを指向するように何となく高級感を演出するような店構えをしていた。

そらはそこでひよこ豆やキドニービーンズなどの数種類の豆類と春野菜をフレンチドレッシングで和えたサラダ、ジュレ状のドレッシングがかかったサーモンとスライスオニオンのマリネ、サーモンやエビといっしょに酢漬けのパプリカやホワイトアスパラガスを巻き込んだ生春巻、薄切りの豚肉を何層にも重ねた間に梅肉としその葉を挟み込んだトンカツ、それとキャベツや根菜類をパテに混ぜ込んだメンチカツを買った。他にもやわらかく煮込んだ洋風の豚の角煮や具沢山のロールキャベツなどが目を引いたが、それらは似たようなメニューを夕子が作ってみたことがあるのを知っていた。

(誰がこんなに食べるんだろ?)

そらは支払いを終えて1人ごちてみた。買い過ぎはそらの不治の病であり、喬生の体重増加の大きな要因の一つでもある。

領収書を貰ってこいとは言われなかったが、自分が持つのは筋違

いな気がしたので、そらはしつかり領収書を手にしていた。親子といえどもそういうところのケジメはつける。それはそらががめついでではなく夕子の教育の賜物だった。

ついでと言ってはなんだが、そらは少し歩いた先にあるイートインスペースもある弁当屋も覗いてみた。そつちはどちらかと言えば質より量、ブランドよりも安さを重視するタイプの店で、メニューも良く言えばポピュラー、悪く言えばありきたりのもので占められていた。おまけに夕方の割引が始まる時間帯なので、当然のことながら、それ目当ての客が割引シールが貼られるのを虎視眈々と見守っている。

もともと、それほど料理上手ではないそらにとって、本来ならこういう店は大いに活用するべきところだった。事実、結婚する前は頻繁に近くのスーパーの惣菜売り場に足を運んでいたし、今でも蕎麦生がないときは買ってきたコロツケとポテトサラダ、インスタントの味噌汁で済ませてしまうこともある。毎日はやりすぎだとしても、共稼ぎであることを考えればたまに買ってきた惣菜を食卓に並べてるくらいは許される範囲だろう。

そらがそうしないのは、初めて手料理を振る舞ったときの蕎麦の嬉しそうな顔が忘れられないからだだった。

でもなあ……。これ、おいしそうだなあ。

そうは言っても、実際に陳列されているものを見れば食べたくなるのが人情というものだ。

頼まれた店のものではなかったが、そらはいつらつらと弁当屋の店先に並んでいた薄炊きの牛肉と椎茸のしぐれ煮の試食に手を伸ばした。

そして、隣に立っていた年配の男性に肩が軽く触れたことを目顔で謝ろうとしたそのとき、そらはその場の誰もが振り返るような大声をあげた。

「草薙さんッ!？」

そこに立っていたのは服装こそこの前の和服ではなかったが、
めかしい風貌の小柄な老人 草薙伊織だった。 厳

「ホントにもう、うちのバカ娘がご迷惑をおかけして……」

カウンターの隠れてしまうほど深々と頭を下げる夕子を見ながら、そらは「誰がバカ娘よ!？」と言いたいのを懸命にこらえていた。

言わなかったのはもちろん、隣で逆に恐縮している草薙の存在があつたからだ。

「いやいや、迷惑など蒙つた覚えはありませんよ」

「でも、そのお怪我はそらを」

「これは私が未熟な証拠です。お気に病まれることはありません」
70歳をゆうに越えている草薙がまだ未熟なら自分はいつたい何なのだろう、とそらは思った。

左手の包帯は1週間前に比べるとずいぶん控えめなものになつて
いる。それでも、草薙は何をするにも利き手ではない右を使つてい
て、その様子には幾らか不自由そうな感じがあつた。

意外な邂逅から30分後、そらは草薙を母親の店に招待していた
というより、招待させられていた。

椅子が8脚ほどのL字型のカウンターと4人掛けの小上がりのテーブルが2つの小さな店。夕子が毎日1時間以上を掃除に費やしているおかげで、そこらのチェーンの居酒屋など足元にも及ばないほどピカピカに磨き上げられてはいるが、そらが小学生の頃から営業しているので内装にはそれなりに傷みも目立つ。

全面改装の話が出たことも何度かある。しかし、先立つものの都合でそれが現実になることはなかった。常連客の一人に内装関係の会社を経営している男がいて、大きな補修だけはほぼ実費でやってくれるのだが、日々の小さな補修は夕子が女手一つで行わなくてはならないのが現実だ。そらは一度、物々しい防毒マスクを被った夕子がかウンター下の羽目板のペンキを塗り替えている現場に出くわして、死ぬほど驚いたことがある。

そういう店にかつては一流企業の社長であった人物を連れて行っていいものか、迷わなかったと言えば嘘になる。

しかし、大量の惣菜を買い込んでいる理由を訊かれて「母の店のメニューの参考にするので」と答えてしまった後の草薙の乗り気な表情を目の当たりにして、今さら「駄目です」とはそらには言えなかった。

「それにしてもあなた、隣にいたのに草薙さんに気づかなかったの？」

そらは横目で母の横顔を睨んだ。

「……そんなこと言ったって、あたしはママのお使いで頭が一杯だったんだもの。それに」

そらは今度は隣の草薙を見た。草薙は小さな笑みを浮かべた。

「この前、図書館でお会いしたときは随分違いますからな」

実際に会ったのは一度だけだったが、そのイメージでは草薙は和装の人だった。その後、幾つかの市の資料などで見かけた写真でも草薙はだいたい和服を着ていた。

しかし、惣菜屋で出くわしたときの草薙は黒いタートルネックのセーターにダークグレイのトラウザーズ、タン色の革のハーフコート、ボルドーのマフラーという若々しい身なりだった。おまけに長い後ろ髪はゴムで束ねられている。明るいところでは白髪が銀髪のように見えたのも、すぐに草薙だと分からなかった理由の一つだ。

ついでに言うなら、例の杖という名の木刀をもっていなかったことも。

「普段はそういう格好をされるんですか？」

草薙は苦笑を浮かべた。

「いつもというわけではありませんがね。しかし、最近新しい大島紬の反物より、ドルチェ・アンド・ガッバーナの春のコレクションのほうがか心躍るのは事実ですな」

「そう、なんですか……」

失礼になってはいけないと平然を装ってみたものの、草薙の口か

らイタリアのファッション・ブランドが澁みなく出てきたことに、そらは驚いていた。しかも、そらの認識ではドルガバといえばイタリアン・ブランドの中でもかなり軽薄な部類に入る。

「しかし、奇遇ですな。まさか、あんなところで樋口さんに会おうとは思ってもいませんでした」

「私もです。あの……草薙さんはどうして？」

「少しばかり遠慮がちな口調でそらは訊いた。

「ちょっと人と会う用があつて街中まで出てきたのですが、待ち合わせに失敗するわ、会ったら会つたで予定より大幅に時間がかかるわですっかり遅くなつてしまいましたね。何処かで食べて帰ろうかとも思つたのですが、なかなかコレだという店がありません。それで、何か買って帰ろうとあの辺りをウロウロしていたわけです」

「そうだったんですか。でも、だったら尚更、すいませんでした」

そらが思わず大声を出したことで、2人は周囲の好奇心な目に晒されることになった。

もちろん、何も悪いことなどしていないのだから形ばかり申し訳なさそうな顔をしてやり過ぎせばそれで済んだはずだったが、動転してしまつたそらは草薙の手を引いてそそくさとその場を離れてしまつていた。当然、草薙は何も買うことができなかった。

「お気になさることはない。正直に言つて、あの店でもピンとくるものは見つかつておりませんでしたのでね」

「でしたら、何か、お召し上がりになりますか？」

夕子が訊いた。

「そうですね。せっかくなので戴きましよう。それと、何か適当なもの冷やで」

「あら、お飲みになるんですか？」

「外では滅多に飲まんのですがね。まあ、車は知り合いのところに残けてありますし、帰りは運転代行でもタクシーでも構いませんからな。できれば、辛口のを戴けるとありがたい」

「承知しました」

夕子は幾つか置いてある地元の蔵のものから一番辛口の酒を選んで、枡の中に置いたコップに静かに注いだ。

酒といえば酎ハイやビール、ジュースもどきのカクテルだった若かりし頃、そらは母親が客の「冷やで」という注文に冷やしていない常温の酒を出す意味が理解できなかった。同じことをそらたちが出入りしていたような居酒屋で言えばキンキンに冷やした300mlの小瓶が出てくるからだ。今ではそれは“冷酒”のことで“冷や”は常温の酒を指すことも知っている。同じ間違った認識を持っていた喬生に自慢げに指摘してみせたこともある。

夕子は小鉢にそぼろの餡をかけたサトイモの煮つけを、木でできた椀に鍋から地鶏のつくねと椎茸、豆腐の炊き合わせを盛った。それらを小さな盆に載せてそらの前に置く。そらは中立ちになってそれを受け取り、草薙の前に置いた。

(……あれっ?)

そらは草薙に気づかれないうちに怪訝な表情を母親に向けた。

今の季節、夕子の店には定番の突き出しがある。えのきやしめじ、椎茸の細切り、時には裂いたエリンギなどの茸類を、遠方の親戚が送ってくるにんにくを漬け込んだ味噌とほんの数滴の醤油で炒めた物だ。

冷えては何にもならないので作り置きこそできないが、茸の下ごしらえをしておけばすぐに作れるしシンプルな割に評判が良いので、よほどせっかちな客でない限りは夕子はこれを出す。そらたちが店に着いたときに夕子はまさに下ごしらえの最中だったし、にんにく味噌もつい先日、新しいものが送られてきたばかりのはずだった。そらにもおすそ分けがあつたので間違いない。

「お箸は大丈夫ですか？」

夕子はそらには取り合わず、草薙に訊いた。草薙は少し照れたように目を細めた。

「そうですね……。子供のように恥ずかしいのですが、スプーンを戴けると助かります」

承知しました、と言いながら、夕子はそつと大振りな茶さじのような木でできたスプーンを差し出した。

そらは母親の意図を理解した。出されたものは全てスプーンで食べられるものばかりだったからだ。逆に得意の茸の炒め物はスプーンで食べるのは甚だ困難な代物だ。

「……お怪我の具合はいかがですか？」

そらは訊いた。いくら気にしなくていいと言われても、目の前で不自由している様を見ては声が沈むのは仕方のないことだった。

草薙は半分に割ったつくねを運ぼうとしていた手を止めた。

「もう、ほとんどのことは不自由しません。箸を持ったり、細かい作業をするのにはまだ不安がありますが。車の運転はもともと左はシフトレバーを動かすくらいしか使いませんが問題はありませんし。そうですね、強いて不都合があるとすれば六尺棒を振れないことくらいですか」

「六尺棒？　って、長い棒をですか」

そらは手の中にそれくらいの棒を持っているような仕草をした。六尺が約180センチのことであることくらいはそらにも分かる。

「左様。まっすぐな太刀筋を保つ鍛錬の一つなのですが、こればかりはさすがに片手ではできませんのでね」

草薙は少し悪戯っぽい目をして、捻挫から3日目に我慢しきれずに例の木刀を両手で振ってみたら飛び上がるほど痛かったことを付け加えた。冗談めかした口調ではあったが、そらには素直に笑うことはできない。

「でしたら、今は右手一本で木刀を振っていらっしやるんですか？」

夕子が口を挟んだ。

「そういうことになりますな。ですが、剣というものは本来、左で持つものですから、右で振ってもせいぜい、筋力を落とさないという程度の鍛錬にしかありません」

「確かにそうですね」

また利いた風なことを、とそらは内心で毒づいた。

決して悪気はないのだが、客商売を長く続けているせいで夕子には適当に相手の話に合わせて、ときに知ったかぶりをしてしまう癖がある。もちろん、そうと感づかれないように上手に相手の話を引き出す話術があつてのことではあるが。

しかし、この話は少し方向が違っていた。

「ほう、御母堂は剣道のことをお分かりですか？」

「高校生まではやっておりましたから」

(……なぬ?)

そらは思わず夕子の顔を見た。そんな話を聞いたことは一度もない。ずっと以前、懸想してくる常連客の一人が店で暴れたとき、店の外に追い出した男の額に箒の柄が折れんばかりの見事な面打ちを決めた現場を見たことはあるが、そらはそれは何でも器用にこなす母親ならではのことだと思っていた。

「これでも、けっこう強かったですよ。個人で全国大会に出たこともありますし。ああ、ちょうどわたしたちのときに玉竜旗に他の地方の学校が出られるようになったんで、福岡まで行ったこともあります」

「私の頃は九州の学校しか出られませんでした。それで、戦績は？」

「1回戦は2本勝ちでしたけど、2回戦で九州でナンバーワンって言われてた選手と当たってしまいました。そこで散りました」

「それは残念でしたな」

2人はしばらく剣道に関する話題で盛り上がった。話から完全に取り残されたそらは、思わぬことで弾む会話を続けている2人の横顔を見守るしかなかった。

歳だけいえば、ちょうどあたしと喬生さんくらいかな。

そらはそんなことをボンヤリ考えた。三十路の娘がいるのだから夕子もそれなりの歳だが、草薙となら少し年齢が離れた夫婦で通じるだろう。しかし。

父親の面影と重ねるには、草薙と河合雄一郎は違いすぎている。

仮に雄一郎が生きていたとしても、草薙のように研ぎ澄まされた鋼のような印象を与える男にはならなかっただろう。物静かな学者肌だったこともあるが、顔立ちもどちらかと言えば柔和な丸顔だったからだ。おまけに若いのに髪の毛の量をずいぶん気にしていたから、おそらく禿げ上がっていただろうことも想像に難くない。

しかし、そらの想像がその方向に進まなかったのは、草薙伊織という男に家庭の匂いがまったくしなかったからだ。その証拠に包帯をした草薙の左手の薬指には、指輪をしていたような痕は見当たらなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7187y/>

熾火

2011年11月23日17時47分発行